

第二回 乳癌の動向

顧問

野村雍夫

前回は申しました通り、わが国の乳癌が増え続けています。図1に示すように、1975年と比べて1998年には女性で乳癌の年齢調整罹患率は約2.5倍になり、胃癌を抜いて第1位となりました。胃癌、子宮癌が減少しているのに対して、乳癌は結腸癌、肺癌などとともに上昇しています。

乳癌の死亡率も、図2のように、大腸癌、肺癌などと同様に上昇し続けています。

世界的にはどうでしょうか。主要28ヶ国の1988年-1992年の乳癌死亡率をみると、図3のように、北欧、北米の各国で高率であり、南欧、中欧で中間、中南米、アジアで低率でありました。わが国は最も死亡率が低い国に属し、最も高率な北欧諸国の約1/4にしか過ぎません。その動向をみるとわが国を含めてほとんどの国で上昇傾向がみられます。乳癌の罹患率の動向も全世界的に上昇傾向にあり、現在罹患率の高い北欧、北米でもさらに上昇し続けています。

しかし、希望もあります。図3にみられるように、いくつかの国で最近乳癌死亡率が低下、ないし平坦化を示し始めています。英国(イングランドとウェールズ)において1950年代から上昇してきた乳癌死亡率が1980年代後半に低下し始め、1993年には低下したことが明確となりました。その低下は高齢者よりも若年者で著しかった。さらに2000年の報告でも1987年から1997年にかけて、英国および米国でとくに中年層で明確に乳癌死亡率が低下しました。この原因が集団検診によるか、タモキシフェンおよび多剤併用化学療法の術後補助療法によるかは明確ではないが、恐らく両方の貢献があると考えられます。すなわち、第1に、この時期に、マンモグラフィによる乳癌検診が盛んになり、微小石灰化などで極早期の乳癌が発見できるようになり、いわゆる早期発見、早期治療が行われるようになりました。第2に、とくにタモキシフェンが乳癌治療に応用され、エストロゲン・レセプター陽性の乳癌の再発や死亡を明らかに低下させました。

しかし、わが国では乳癌の死亡率が最近になって低下するという傾向はみられず(図2)、将来予測でも2015年まで乳癌死亡率と罹患率は上昇すると予測されています。わが国の乳癌死亡率が低下しないのはなぜでしょうか。低罹患率の集団では上述のような取り組みの遅れによるのでしょうか。この原因を解明することが重要です。

今回は乳癌の発癌のメカニズムとリスク因子、乳癌の予防についてお話しします。

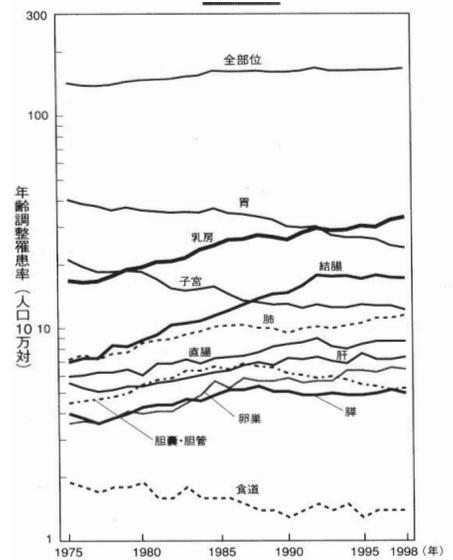


図1 厚生労働省がん研究助成金「地域がん登録」研究班による「がん罹患数・率全国推計値(1975-1998)」, Jpn. J. Clin. Oncol., 33(5), 241-245, 2003より

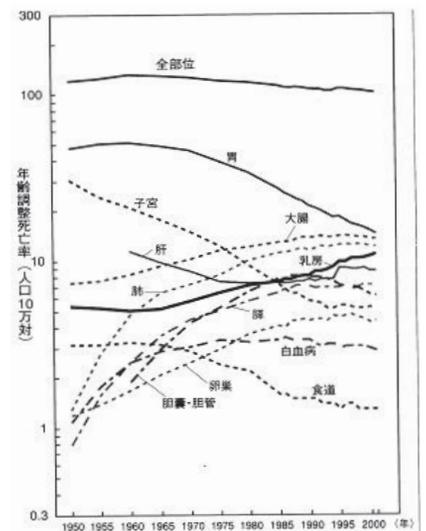


図2 厚生労働省大臣官房統計情報部編「平成13年人口動態統計」, 2003より

3. 主要国の乳癌の年齢調整死亡率の動向

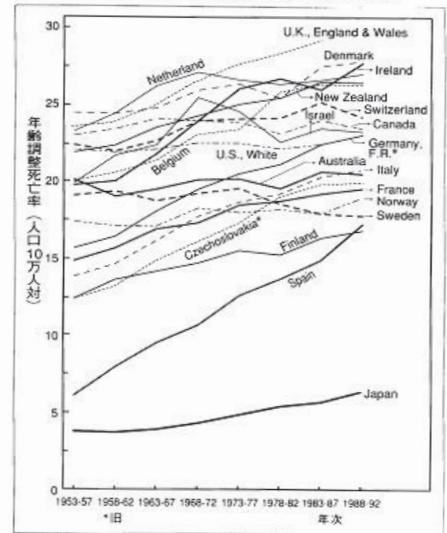


図3 Tomihaga S, et al.: Cancer mortality statistics in 33 countries, 1953-1992. UICC, Rospe Shupan, 1998より